

## ショートショートもどき:神の椅子

ある日、神が純白の大理石でできた椅子に腰掛けていると、心貧しき医師ルドルフが神殿の前にやってきて跪き、神に懇願し始めた。

「神よ。この私に天才的な脳外科手術の才能を与えたまえ。」

神は、興味を持ち、ルドルフにその能力を与えてみた。ルドルフは喜び狂い、舞うようにしながら自分の大学病院に戻った。そして、助手のヘルマンに語りかけた。

「ヘルマン。いよいよ脳の移植手術をする日が来たぞ！」

ヘルマンは、「ついに発狂してしまったのではないか」と思ったが、その気持ちは内心に押しとどめ、おそろおそろルドルフに尋ねた。

「教授。例の交通事故で右脳だけ脳損傷のあるマリアという患者のことですね。尊称を受けている側だけの脳移植手術をしたいけれども現在の医療技術では全く無理だと諦めておられたのではありませんか？」

ルドルフは、怯えるヘルマンの顔を嘗め回すようにして見つめてから、威厳をもった声で自信満々に答えた。

「いやいや、可能だということが分かったのだよ、ヘルマン君。僕は本当の天才なのだ。早速、冷凍保存してある例のカトリーヌの右脳部分を解凍してくれ。マリアの損傷した右脳部分を全部切除した上でカトリーヌの右脳部分を移植する。」

ヘルマンは、反抗すると厄介なことなると思った。そこで、表面ではルドルフを賞賛するようなふりをするにしてみたのだが、実はちょっと嫌な予感のようなものを感じた。そこで、小声で尋ねてみることにした。

「教授。有名なコリン・ウイルソンという学者は、人間の脳の片側には悪魔が住み、他方の側には神が住んでいると言っています。もしマリアの脳の残存部分に悪魔が棲んでいるままだとして、カトリーヌから移植する脳にも悪魔が棲んでいるとしたら、大変なことになってしまうのではないのでしょうか。大丈夫ですか？」

ルドルフは、胸をはり、咳払いをした上で、ヘルマンに微笑みかけた。

「ヘルマン君。僕は、外科手術の天才として神に認められた人間なのだよ。そのことを忘れてもらっては困る。コリン・ウイルソンが言っているのは、人間の右脳と左脳とでは

主な精神機能が異なるということを比喩的に述べているだけのことだ。彼は、宗教家ではなく犯罪心理学者だったはずじゃないかね。それに、人間の頭の中に神や悪魔が棲んでいるはずがないだろう。そうじゃないかね？」

ヘルマンは、「いつ、外科手術の天才として神に認められたんだ？」と不思議に思った。けれども、ルドルフに反抗すれば自分の将来がなくなることは確実だ。それに「たしかに悪魔が脳に棲んでいるはずはない」と思い直し、ルドルフの言うとおりに手術の準備をすることにした。ただし、その心の底では、「どうせこの手術は失敗する。そして、もう何ヶ月の間ベッドの上で植物人間状態となっているマリアもこの手術によって死ぬことになるのだ。マリアよ、カトリーヌが待っている天国へと安らかに旅たってくれ。」と思った。

数時間後、脳片側移植手術の準備を整えると、ヘルマンはルドルフにその旨を報告した。手術台に乗せられたマリアの顔はとても安らかで、まるで天使のようだった。

手術は、ヘルマンの予測に反し、まさに天才の技としか言いようがないほど完璧なもので、大成功だった。ルドルフがマリアのすべての脳組織をカトリーヌの脳組織と交換し、脳神経を接続し直すのに、何とたった1時間しか要しなかったのだ。

手術後、マリアは直ちに意識というものを回復しはじめたかのようにも見えたが、なおベッドの上で眠り続けていた。ルドルフは、ヘルマンに経過観察を命じた上で、自分の研究室に戻った。そして、記者会見をすべく、新聞社に電話をかけまくった。

10分ほど経ったとき、ヘルマンがマリアを見守っているはずの病室のほうで何か大きな物音がした。

「ヘルマン！ どうしたんだ。騒がしいぞ！」

ルドルフが受話器を手で塞ぎながらそう大声をあげると、物音は静まった。

そこで、更に新聞社との電話を続けようとする、何やら殺気だった風と共に研究室のドアが開いた。そこには、口から血をしたたらせ、衣服を真っ赤に染めたマリアが立っていた。

いや、マリアではないかもしれない。その背中には蝙蝠の羽のようなものが生えているではないか。そして、男のような低く重々しい声でルドルフに語りかけた。

「ごきげんよう教授。感謝するわ。感謝のしるしに教えてあげる。神がいれば悪魔だっているのよ。それに、コリン・ウイルソンは、悪魔が棲んでいるのは左右どちら側の脳だとは限定していなかったでしょ？」

ルドルフはとっさに全てを悟った。しかし、既に手遅れだった。